

学位論文題名

表現課題による日本文学作品の
読みの指導に関する研究

学位論文内容の要旨

この論文では、日本文学(小説)の特質に注目し、表現課題を用いた指導過程によって、作品の表現を理解し、その作品世界に迫ることができるような授業の実現を目指した。中国文学のストーリー性に比べて日本文学の特質は表現性にある。そのような特質を典型的にそなえた作品として、『蜜柑』(芥川龍之介)、『山椒魚』と『鯉』(井伏鱒二)を取り上げ、作品に書かれていることがらや構成のみを手掛かりとして、作品のイメージを読み手が自ら作り、膨らませていくプロセスの構成を試みた。

豊かな表現性を持つこの3作品を指導していく上で有効なのが、北海道大学教育方法学研究室で芽生え、取り組まれてきた「表現・構造課題方式(仮称)」と思われる。この方法に基本的に依拠しながら、「構造」を「表現」と別にするのではなく、いずれも「表現」の概念に含めうるという立場を取り、表現課題方式と呼ぶ方法を定式化した。

表現課題方式とは、「場面」や作品構造を集中的に担う表現に注目し、その表現の必然性、多義性を読み取ることができるような課題を設定し、授業で討論し、読みを深めていく方式である。この表現課題方式にもとづいて、作品分析を踏まえ、指導案を作成した。上の3つの作品に関する指導案を作成する基本的なカテゴリーとして、「曖昧」、「牧歌」、「ペーソスを交えたユーモア」の3つを設定した。

日本文学を理解する上で、「曖昧」を読み取ることは極めて基本的なことである。「曖昧」とは、「一つの表現に対していくつかの可能な反応の余地が」(エンブソン)ある。それを分析すれば文学世界の意味の核心に迫る、という独特な表現方法である。日本文学は繊細で、含蓄に富んでいるから、語句を表面的に理解するだけでは、作品の豊かさを味わい、楽しむことができないのだ。なぜ一義的な表現を使わないで、「曖昧」な表現を使っているかを明らかにする必要がある。「曖昧」な表現を読み取るように指導すれば、一つの読みだけではなく、多様な読みにも気づき、作品世界を豊かな想像力によって構築する学習者の能動性を、より効果的に引き出すこともできる。『蜜柑』の授業実践では、「曖昧」を追究することで、学習者に思考と想像を十分に発展させ、作品世界を豊かに理解させることに成功した。「曖昧」を追究する際、同じ回答が得られないことが多いため、討論によって作品の理解を皆で深めあうような授業にすることにも大きな意義がある。

牧歌は、宮廷人、インテリなどが牧童、羊飼いを描くものだ。本来宮廷人、インテリなどと牧童、羊飼いはまったく「異なった感情様式」（エンブソン）を持っている。宮廷人やインテリなどの書き手は、この違う次元に属する別々の感情様式を作品の中で衝突させながら、新しい世界を見せてくれる。井伏の作品は、「庶民について語りつつじつはきわめて貴族的、田舎について語りつつじつはきわめて都会的」な構造であり、「だから〈牧歌〉なのである」（川崎寿彦）。『鯉』では、鯉の泳ぎまわる「すばらしい光景に感動のあまり涙を流しながら、音のしないように注意して跳込台から降りて来た」「私」は、寒い冬の朝、冷たい氷の上に竹竿で大きな鯉の絵を描いて、「すっかり満足した」。『山椒魚』では、「何たる失策であることか!」、「寒いほど独りぼっちだ!」というかなり知的な言い回しをするのは、頭が大きく、四つ足の不気味な山椒魚なのだ。いずれも複雑なもの単純なものとの間に、「曖昧」で面白い対照が描かれている。古風で、貴族的な表現と通俗的な登場人物との対照が妙である。

ユーモアは悲しみ、ほろ苦さを道連れにしているものが多い。笑っている内に涙が滲んでくる悲しさ、ほろ苦さである。私はこのような「涙と笑い」（織田正吉）のユーモアを、「ペーススを交えたユーモア」と呼ぶことにした。井伏文学の大きな特色は、「微笑と共に忍び込んでくる切々たる哀傷、即ち、人生詩的なペースス」（浅見淵）であり、「笑いと泣きが表裏になっている」（松本鶴雄）。尊大で、強がりな「山椒魚」の姿には、おかしさと淋しさが共存している。『鯉』で、寒い冬の朝、氷の上に大きな鯉の絵を描いて「すっかり満足した」「私」の行為には、笑いとともにも人生の哀愁が同居している。

「表現課題方式」の指導過程としては、2つの段階に分ける。「第1の段階の読み」では、これら3つのカテゴリーにもとづいて、表現の意味を読み取る部分課題・場面課題を設けた。部分課題は場面の理解には重要な関わりを持たない見事な表現、場面課題は場面全体の理解と関わる表現を取り上げる場合を指す。この場面とは作品を構成する単位としての「場」と、「場」を担うのに適切な表現としての「面」とを合わせていう意味だ。ストーリーの区切りではなく、作品を作り上げている本質的な要素として考えている。

「第2の段階の読み」では、個々の作品において独自の形でされているので、作品に即して、作品の核となる表現を理解する構造課題を設けた。『蜜柑』では、蜜柑の色と空のどんよりとした色のコントラストに注目して、蜜柑の鮮やかな登場、たちまちからりと裏返された「私」の心持ちとのダイナミックな変化の対照として読み取り、作品全体の意味を理解する構造課題を設けた。『山椒魚』の構造課題としては、ラストシーンの改作前と改作後の比較によって、表現に即して、学習者が自ら作品世界の違う効果を味わい、文学を読む楽しい体験ができることを狙った。『鯉』では、鯉がプールで泳ぐ雄姿のあとに、「私」が氷の上に大きな鯉の絵を描く場面が続く。鯉の絵を描く場面があるからこそ、単なるハッピーエンドではなく、「ペーススを交えたユーモア」の深い余韻を持つ結末となっていくことを理解できる構造課題を設けた。課題を作るのは、学習者に謎ときの緊張感と混じり合わせながら、作品の仕組みを考える契機を与えるためだ。これらの課題設定によって、形式的に作品を理解させることなく、表現を分析して、作品の面白さに迫り、理解させていく、そうした授業の出発点を見出し得たと思う。

作品の表現の膨らみや味わいを丁寧に、確実に指導していくと、中国人学習者も、その作品の世界をより深く理解すると同時に、日本文学の面白さと魅力の一端を感じとることができる。このような体験を重ねることで、学習者自身の日本語に対する豊かな理解力と細やかな感受性を養い、ひいては日本文化、異文化への開眼、積極的な理解に導くことにも役立つのではないか。これが外国語教育の真の目的だ、と私は考えている。

私としては、日本の文学作品について、指導案の作成や授業の実践を通じて、さらに「表現課題方式」を深めていきたいと考えている。「表現課題方式」の指導過程論のより豊かな展開のためには、まだ様々な問題点を抱えている。これを序論として、今後引き続き優れた文学作品を分析し、具体的な指導案づくりと授業の実践を重ねていく。

学位論文審査の要旨

主 査 教 授 須 田 勝 彦
副 査 教 授 逸 見 勝 亮
副 査 教 授 神 谷 忠 孝

学 位 論 文 題 名

表現課題による日本文学作品の

読みの指導に関する研究

本論文は中国における日本語教育の一領域である文学作品の読みの指導に関する教授学的研究である。日本では文学作品の指導過程に関する研究は明治期後半以来の、豊かな伝統と遺産を持ち、今日に至るまで教授学研究と一体となって進展を続けている。本研究はこれらの成果を継承発展させながら、中国における日本語教育の改善に寄与することを試みるものである。

本論文の構成は、序 課題と方法 第Ⅰ部 文学作品の読みの指導過程について 第1章 日本文学（小説）の特質と読みの本質、第2章 表現の分析 第3章 文学作品の読みの指導の方法 第Ⅱ部 作品分析及び指導案の構成 第4章 芥川龍之介の『蜜柑』 第5章 井伏鱒二の『山椒魚』と『鯉』となっている。

序では中国における日本の文学作品の読みの指導の多くが、辞書的意味のレベルの読解と、作品に対する外在的、イデオロギー的評価にとどまっており、文学作品の読みの指導とはなりえていない現状が要約され、日本文学の特質に注目しそこに描かれている表現の技巧を正確に読み取ることによって作品の豊かな世界を理解させることが課題として設定されている。

第1章では主として吉田精一の研究に依拠して日本文学の特質を概括しながらその読みの指導においては、中国で用いられているテーマ主義的な方法が適さないことを明らかにしている。そして作品そのものを凝視し、複雑微妙なことばの構成を丹念に解き明かし、作品を組み立てている含蓄を分析的な手法で批評することの必要性が述べられ、かかる分析に用いられるべきカテゴリーの設定が課題であることが示されている。

第2章ではこれまで文学理論、文芸学、文芸批評等の分野でW. エンプソン、川崎寿彦、戸坂潤らによって検討されてきた「曖昧」「牧歌」「ペーススを交えたユーモア」という分析のカテゴリーをとりあげ、それぞれについて研究の到達点を整理し、新たに本質規定が試みられた。さらに本論文が課題として取り上げる3つの作品の分析において、上記の3つのカテゴリーがどのような有効性を持

ち得るかが検討されている。文学作品の読みの指導の前提となる作品分析の方法的枠組を構成する概念として、上記3つのカテゴリーが広い適用範囲を有することに鑑み、作品に即してその現象形態が析出されたことは高く評価できる。

第3章では文学作品の読みの指導に関する既往研究の検討がなされ、新たな提言がなされた。主として北海道大学教育学部教育方法学研究室で開発されてきた方法である「表現・構造課題方式」（仮称）の積極的意義を考察しながら、構造課題のレベルでの概念設定の不整合を批判し、構造もまた表現の範疇に入るべきこと、構造課題の設定は当面は一般論を立てるより、個々の作品の個性に応じて考えるべきことを示した。このような整理を加えた上で、この方式を「表現課題方式」と命名した。これは同研究室の研究を一步前進させたにとどまらず、教育科学研究会・国語部会、文芸教育研究協議会等の従来の研究成果を受け継ぎ、発展させる上で重要な貢献をなしたものと評価できる。

第4章では芥川龍之介『蜜柑』について、上記表現課題方式による指導過程の構成が試みられた。作品を8つの場面に分け、それぞれの場面全体を読み取るのに必要な中心的な表現に焦点をあて、それを理解するための課題が設定された。部分課題・場面課題には「想像的破壊」「『曖昧』の読み取り」「描写の類型化による異質性の発見」などの方法が用いられた。構造課題としては「蜜柑の色と空の色のコントラスト」に着目しうるような課題が設定された。これらの課題群を日本人大学生1クラスに課し、この作品を読み深める上で有効であるとの結果を得た。この作品について、これらの表現課題が開発されたことは文学作品の読みに関する教授学的研究において大きな前進であると評価できる。

第5章では井伏鱒二『山椒魚』『鯉』に関する表現課題が提案された。井伏の作品の組み立ては、第2章で検討された「曖昧」「牧歌」「ペーソスを交えたユーモア」という3つのカテゴリーが総合的に関連しており、課題の作成においてそれらのカテゴリーを用いた分析が有効に用いられている。構造課題として、それぞれの作品に対する作者自身による改作をめぐる逡巡と等価な内容を「課題」の形で考えさせるものが設定されている。これは井伏鱒二の作品に即した特殊な方法であるが、「想像的破壊」という表現課題方式の手法の拡張とも考えられ、この方式の有効性を裏付けるものでもあった。

以上要するに本論文は、日本文学の特質である表現性の細やかさを中国人学習者に伝えるのに有効な方法を開発したこと、それが中国人学習者に特定されない普遍性を有すること、さらに日本の国語教育の理論・実践の進歩にも貢献し得たこと、において水準の高い独創的な研究であることと認められる。

よって審査員一同は、本論文の提出者 裴 崢 は北海道大学博士（教育学）の学位を授与される資格があるものと認める。